柿生郷土史料館第102回カルチャーセミナー

教育の歩み（その2）　学級の誕生

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

☆　印刷機の発達と宗教改革の結果　➔　書物の出版が時と共に増えて行く

➔　文字を覚えて、自分も本を読みたいという欲求が強まる。

➔　対立するカトリックもプロテスタントも、民衆に分かりやすい優しい絵入りの廉価な書物などを作って、民衆の教化に熱心になる。

➔　日本に布教にやってきたカトリックの神父　少年使節団を派遣して、日本に2台の印刷機を持ち帰る。キリシタン版と名付けられた書物が現在でも200点以上、弾圧を潜り抜けて現存している。　最初はローマ字表記、その後日本の文字の書物も最大のコレクションは天理大の図書館、印刷博物館にも数点保存されている。
2台の印刷機は、惜しいことに徳川幕府の手で、1613年に2台とも破壊された。

☆　庶民の学習意欲の高まりと新旧教会の信者囲い込みと拡大の思惑

➔　民衆教化のため初等教育が日の目を見る。　スウェーデンは文字の読める人が、子ども含めた人口の80%に達した。

➔　スウェーデン程でなくても、諸国は初頭教育に熱心
フランス、ルイ14世は、1692年（元禄5年）12月の王令で教区に最低1校の初等学校を設けること、学校には男性教師と女性教師の2名の教師を置くことを命じた。
イングランドでは、イギリス国教会が17世紀の終わりごろから、宗派の影響力を固めるため、初等教育重視に力を入れた。

☆　当時の学校とは、

➔　村が先生を雇うことだった。学校を作れとは先生を雇えということだった。独自の校舎を持つことは想定されていない。授業の場は、教会の回廊だったり、大きな農家の作業場だったり、晴れた日は広場だったりした。

➔　先生も薄給。職人の1年間の収入を1とすると、男性教師で0.5女性教師は0.35程度だった。これでは食べていけないので、教会の司祭の助手を務めたり、結婚式の手伝いをしたり、文書整理の仕事を担当して生活していた。当然教会の司祭の助手とみなされ、司祭の言いなりだった。

➔　教えるのは、読み、書き、計算と「公共要理」（カトリックの教えをかみ砕いて教える科目）の4種類。公共要理は子どもたちに不評だった。

☆　ラ・サール会の登場、

➔　1680年ごろ、パリに「キリスト教学校兄弟会」通称「ラ・サール会」が誕生した。指導者はジャン・バティスト・ド・ラ・サール。この団体は現在まで存続している。鹿児島と函館のラ・サール学園の運営主体。

当時無料の慈善学校を運営していたのは、教会や修道会だったので、学習法はラテン語の読みから入り、初歩のラテン語の読み書きが出来たら、現地語のフランス語に入るスタイルだった。やってきた子どもたちは、聞いたこともない言葉をおぼえろと言われても、なんだか分からない。すぐに学校がいやになってしまう。当然成果はあがらない。ラ・サール校はこの順序を入れ替え、まずフランス語の読みから入り、次に書き方の練習。進んだところでラテン語に入る学習法を取った。活動は都市部に限られたが、大人気となって豊かな家庭の親たちも、ラ・サール校へ子どもを入学させた。

➔ 18 世紀に入ると、まず現地語を学ぶスタイルが定着する。このスタイルは強力になりつつあった各地の王権の庇護を受けて定着した。(王は、自分の支配地域の言語を国内他地域にも広めることに熱心だった) 支配はまず言葉から…

➔ ラ・サールは生徒が増えてくると、進度が同程度の生徒を集めて一緒に教える方式を取り、都市部を中心にこの方式が広まる。
この教育スタイルは、学級制の初期的姿のように思えるが、同一年齢の子どもたちを集めるという発想はもっていなかった。年齢はマチマチだった。

➔ 1690 年代のフランスの識字率、男性 28%、女性 14%だった (結婚契約書の署名で判断)。100 年後の 1790 年 (フランス革命の最中) には、男性 48%、女性 26%に拡大していた。100 年の歩みとしてはゆっくりに見える。

☆ イングランドでは… ジョセフ・ランカスターの試み

➔ 19 世紀初めの、ロンドンの貧困地区イーストエンドの一郭で、ジョゼフ・ランカスター青年がモニトリアル・システムと名付けられた風変わりな教育法を取る学校を始めた。替えはピューリタン (イングランドのカルヴァン派) の信者。

➔ この学校は先生が生徒に教えるのではなく、モニターと呼ばれる生徒リーダーが、その他大勢の生徒に教える方式をとっていた。

➔ 先生のランカスターは、年長の生徒の中から、優秀と思える生徒を選んで、選んだ生徒帯にだけ、必要な知識を教え、十分マスターしたことを確かめた上で、彼らモニターに先生役を担わせた。

➔ モニターが教えるのは、およそ 10 人程度の生徒だった。先生なら給料を払う必要がある。貧困地区なので授業料は安くしたい。生徒が増えるとその分授業料を安くしてあげたい。ランカスター青年はこう考え、給料の必要のないモニター制を考えた。モニターへのご褒美は、授業料の免除で十分だったから。

➔ モニターが先生役を十分務める事が出来るようにするためには、教授内容は出来だけ簡略化する必要があったから。教育の世界に効率という考え方を持ちこんだ。

➔ 入学した生徒は、ゼネラルモニターによって、読み書きと計算の能力を確かめられ、所属するコースが決められる。生徒は読み書きで 8 段階、計算で 12 段階のどこかに振り分けられた。このために各コースを担当するモニターとは別に、読み書きと計算の夫々にゼネラルモニターと呼ばれたモニターの責任者が置かれていた。ゼネラルモニターが全クラスの生徒名簿を持っていた。名簿には試験の実施日、結

果、移動したクラス等が、全て記載されていた。

➔ 各コースの授業内容は、別表のように定められていた。

➔ 進級はまさに個人の能力、学習到達度によってきめられていたことが読み取れる。成績が振るわなければいつまでも同じクラスに留め置かれた。

➔ このシステムは「学級制」と呼ばれ、19 世紀の一定期間、イングランド以外でもクラス分けの指標とされた。

➔ ランカスターの学校は、当初父親の別宅を借りてスタートしたが、生徒数が増えて手狭となり、移転が必要に。彼に幸いしたのは、19 世紀の前半は工場制度が広まり始めた時期で、貧しい子どもたちの躾が課題となっていた。躾のためには教育が必要と考えられ、それが社会的要請と受け止められていた。そのためランカスターは寄付を受けやすかった。ケント公がすぐに支援を申し出て、建築費を出してくれた。図のような単一の大教室を持つ学校が造られた。バラロード校と命名された。

➔ 教室の風景。長い机と椅子が整然と並び、正面に教壇があって、そこにマスター（先生）が座っている。教室の後方は高くなっていて、先生は全てを見渡せる。机と椅子には、1～8 または 1～12 の数字が記され、クラスの場所を示している。書き方など、筆記を伴う授業はここで行う。当時貧しい子は筆記具や紙類は持ちえないので、文字や数字は備え付けの石版に書かせていた。読み方や暗算など書く必要のない授業は、教室内の半円軽の場所に移動して立ったままで行われた。午前は読み書き、午後は計算の時間。

☆ ベルの学校

➔ ランカスターより、ほんの少し早い時期に、インドのマドラスで、アンドリュー・ベルが「マドラス方式」と名付けられたモニトリアルシステムの学校を開いてた。赴任宣教師（当然国教会）だった彼は英軍兵士と現地夫人との間に生まれた混血孤児の教育を担当、子どもたちをイギリス人兵士に育てるための初歩の教育を担う。

➔ そこで、モニトリアムシステムは、2 人の名からベル・ランカスター法と呼ばれた。

☆ モニトリアルシステムの問題点

➔ ベルの学校もランカスターの学校も、モニターを使うので、簡略化したマニュアルを作成し、システムの普及のために公開していた。さらに、学校が軌道に乗った二人は、イングランド各地などを講演して回る。

➔ マニュアルを利用すると、誰もが真似をして学校を開くことが可能。

➔ 1813 年、ランカスターの名を冠した「英国王立ランカスター式学校普及協会」が誕

生、翌年には「内外学校協会」となって、教育の普及を目指す団体も誕生した。

➔ 学校が増えるにつれ、優秀なモニターは集めづらくなる。その結果モニター養成機関設立の要望が出てくる。

➔ バラロード校は、モニター養成機関に衣替えした。

現在のブルネル大学教育学部。しかし、モニターは、いくら養成してもモニターのまま。教育要求が高まり、地理や歴史、自然現象、音楽・体育など多様な教科が学校教育に取り込まれる。ベルの学校は国教会系なので、宗教教育や道徳教育も欠かせない。こうした多様な教科を教えるのはモニターには無理。

➔ 単一の教場に、多くのクラスがひしめき、あちこちから声が上がる。騒音で聞き取れない。大教室方式は物理的に行き詰まる。

➔ 規律と権威に依拠して教室の秩序を守る方法では、生徒の授業への関心を保ち、

高めることは不可能。学習意欲の減退は中途退学の増加につながった。

☆ 学校数の推移

➔ 「国民教会系」(国教会系)の学校と「内外学校協会」系の学校の学校数の推移を表で確認。両派は、互いに競うことで、イングランド全土に初等教育を普及させることに大きく貢献した。表を見ると 1830 年代と 40 年代の急増ぶりが目立つ。何故か?

➔ 1833 年に英国政府が、初等教育に国庫補助金を支給し始めたことが大きい。
学校建設費の半額を大蔵省補助金として支出した。何故大蔵省? 当時のイギリスには、教育を司る官庁がなかったから…。

➔ 大蔵省はノウハウを持たない。そこで表にあった二つの団体に相談。団体を通して交付することにし、建物の検査も依頼した。二つの学校系の学校が急増した。

☆ 枢密院教育委員会の誕生

➔ 補助金の急増対策。 学校建築基準を明確化し、厳重に守らせた。一方で児童労働の社会問題化が注目を集め、1833 年第一次工場法制定。
ロバート・オーウェンは幼児学校と初等教育学校を併設した。そこでギャラリー方式と呼ばれる、新しい一斉授業方式を採用した。1 人の先生が大勢の生徒に教える方式。先生と生徒が対面する対面方式が初めて登場した。この方式は、オーウェンの弟子たちによって、各地に広まる。

➔ ギャラリー方式では、レベルの様々な生徒を一緒に教えるのは困難。レベルの似通った生徒を集めて、いくつかの集団に分け、別々の場で教えることが必要になる。最初は大教室をカーテンや衝立で仕切って授業。次第に複数教室を持つようになった。

➔ 教室が増えると、増えた分だけ先生を増やさないといけない。大量の先生が必要になった。これは大変な難問。

➔ 登場したのが見習い教師制度。初等学校を卒業した 14 歳から 17 歳の成績良好な少年を見習い教員として雇用。5 年間の見習い期間終了後に師範学校に進学させ、卒業

したら正規教員として採用しようというプラン。田山花袋の『田舎教師』に出てくる助教師制度に近い。

➔ 委員会は努力を続けたが、増え続ける需要に国家の教育補助金は増え続け、1860年には国家予算に占める教育費の割合は、17%近くに達した。クリミヤ戦争の戦費負担で大変だった時期なので、国庫補助が正しく使われているか審査する委員会を議会に設けることにし、1859年ニューカッスル委員会が誕生した。

☆ ニューカッスル委員会

➔ 健全で安価な初等教育を全ての階級の人たちに提供するために必要な措置を取ると宣言して、活動を開始。正規教員の我儘の禁止。そのための教育内容の再整理を行う。1860年教育令発令、62年改正教育令。
改正教育令で教育内容を徹底的に絞った。高級な内容は私学に任せ、読み書き計算の各6段階に絞った。内容は別表参照

➔ 学校への補助金は、出席5割以上の生徒数と、きちんと進級した生徒数に応じて、支給するとした。休みがちな生徒を減らす努力と、進歩の遅い子を減らす努力が学校に科せられた。学校への補助が減れば自分の月給も減る。必死になるしかない。

➔ 確かに出費は抑えられたが、教師の自尊心は著しく傷つけられ、生徒も堅苦しく縛られた。

➔ 教育課程表の登場で、学年制と学級制が整ったが、まだ同一年齢制という発想はまだない。学級は異年齢のままだった。

☆ 貧民の学校＝私設學校の問題

➔ 政府の補助を得られても、それは経費の全額ではない。授業料は半額補助。残りの半額は自己負担。当然学校には、最下層の貧民の子は通えない。1833年の法令で9歳以下の子供の就労は禁じられたが、各地のスラム街では、6歳ごろからの子どもも働かされていた。女性労働は安く使えたが、子どもは女性よりもさらに安かったので、政府に内緒で、子どもたちを就労させているスラム街の経営者は多かった。

➔ それでも19世紀後半に入ると、下層の労働者の間にも、読み書き計算の初歩ぐらいは習得する必要性が理解されてくる。しかし、公費補助を受ける学校に通わせる費用は出せない。仲間内の読み書きのできるものに依頼して、子ども預ける私設の学校が、あちこちにできる。授業料は週に3ペンス程度。最下層労働者の週休は5シリング程度。1シリングは12ペンスなので、週休は60ペンスこども1人を通わせると、週給の5%が教育費に消える。それでも教科書の負担がなく、必要なことだけ学べばよいので、通学期間も短くて済む。自分たちの生活信条に合わないことを学ばされることもない。

➔ 下層階級の人々は、互いに助け合ってかつかつの生活を送っていました。大怪我をして働けない隣人を近所で協力して面倒を見るのが、彼らのルールだったのです。困った人を助けるのが、彼らのルールだったのです。友達が答えが分からないで困っていたら、親切に教えてあげるのが彼らによって良いことでした。従って彼らには、カンニングは悪だという発想はないのです。　これは組織化された学校のルールとは真

逆の考えになります。

☆　政府の対応と義務教育の誕生

➔　政府が補助金を出す学校は、何事も決められた時間単位で動くように、システム化されている学校です。競争的個人主義に基ずくブルジョワ階級や中上層の労働者の倫理観に適合的な学校です。

➔　私設學校は、政府や支配層にとって、排除すべき存在でした。学年・学級制を整備した政府と議会にとって、最後の課題が私設學校潰しだったのです。そのための切り札となったのが、授業料無償の義務教育だったのです。

➔　1870 年制定の初等教育法。国が教育制度を法に依って定めた最初のケース。ここで、決められた学務委員が地域の学校を精査し、公的補助を支給する条件を満たしているかどうか調べ、合格すれば授業料を無償とするに足る規模の助成をする。足りないケースは、正すべき点を指摘して再審査して判断する。審査を申告しない学校、審査に不合格のままの学校は、学校名簿から外され、私設學校のほとんどが廃校に追い込まれた。

➔　ロンドンだけで、44,000 人の子どもが未就学児扱いされることになった。この子たちを何とか学校に収容しなければならない。親たちは、1度潰された私設學校の再建に動く。慌てた当局は1876年新たに教育法を制定。10歳以上の子どもの就労には、就学照明の提出と確認を義務付け、正規の学校に就学しない児童は、職に就けないようにする、強権策を打ち出した。

➔　こうして、6歳で初等学校に入学し、6年間在学する同一年齢の集団を核とする学年学級制が誕生するに至るのです。

以　上

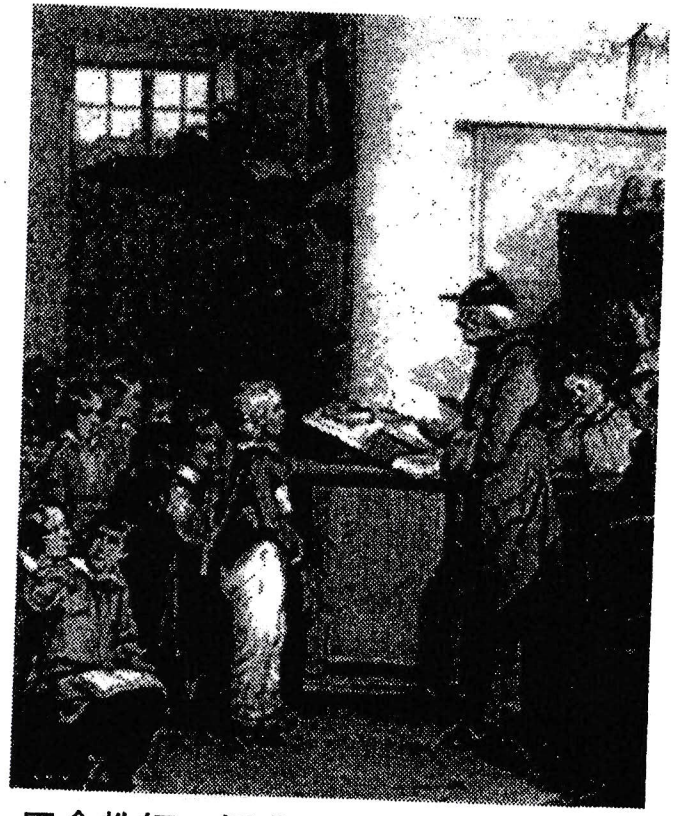
キリシタン本の1冊。上にローマ字で「ニッポンのイエス」と下に片仮名で「ドチリナキリシタン」と記されている。（天理大学図書館蔵）

本の行商人　読みやすい現地語で書かれた廉価本を中心に各地を巡回していました。

国民協会系と内外学校協会系の学校数の推移		
設立年代	国民協会系	内外学校協会系
1801-1811	350	28
1811-1821	750	77
1821-1831	897	45
1831-1841	2002	191
1841-1851	3448	449

表 1

「公共要理」の授業



田舎教師の授業風景
1人1人順番に文章を暗誦させています。

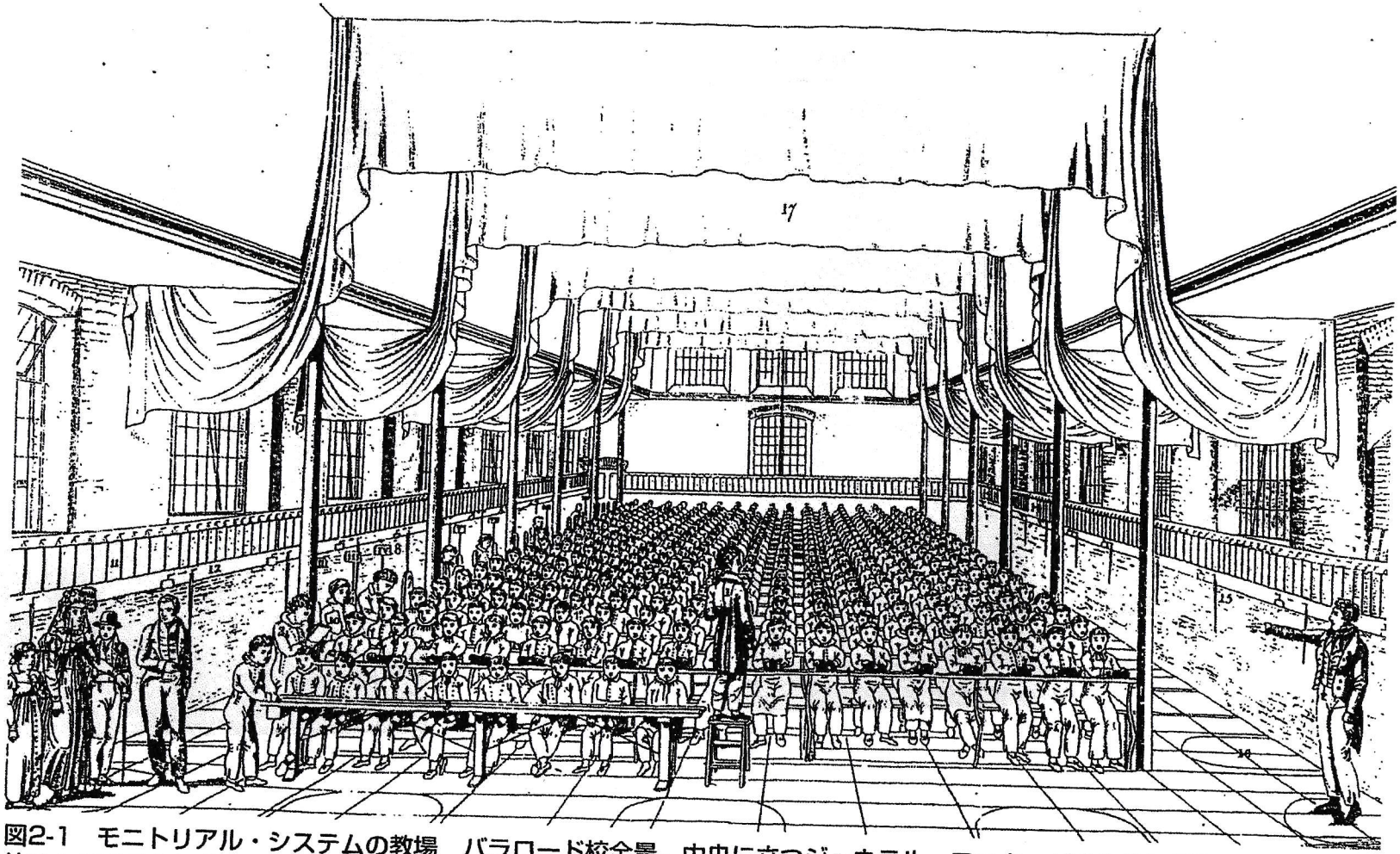
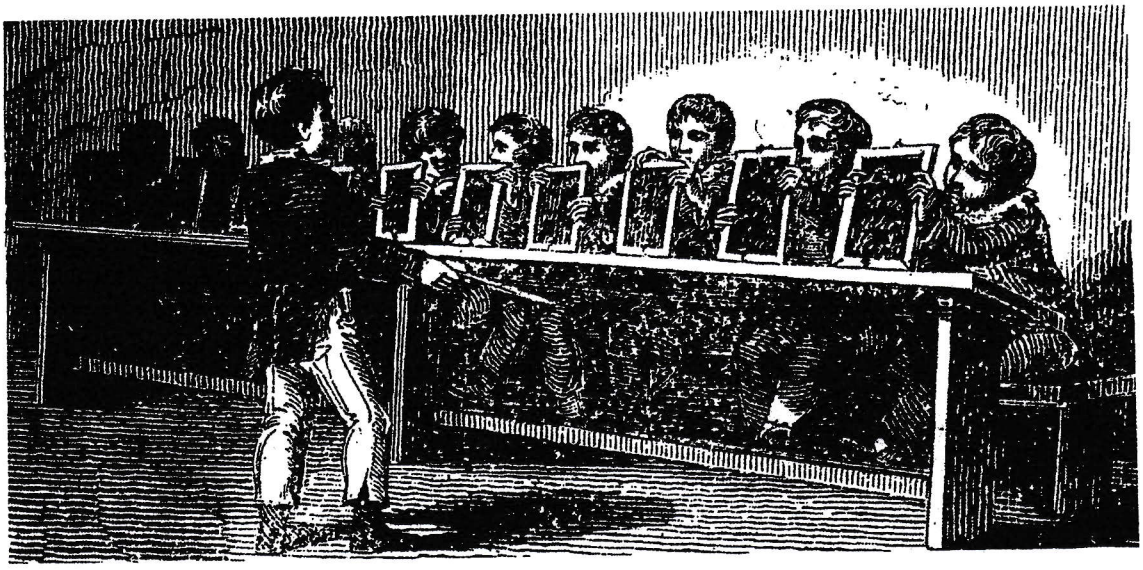


図2-1　モニトリアル・システムの教場　バラロード校全景。中央に立つジェネラル・モニターが全生徒に指示を与える。生徒はクラスごとに分けられ、机の端に立つクラス・モニターの統制下にある。右端の人物が教師、左端は見学者。壁にレッスンブックが掛けられている（内外学校協会〈B. F. S. S.〉の1837年版マニュアルより）.

図 3



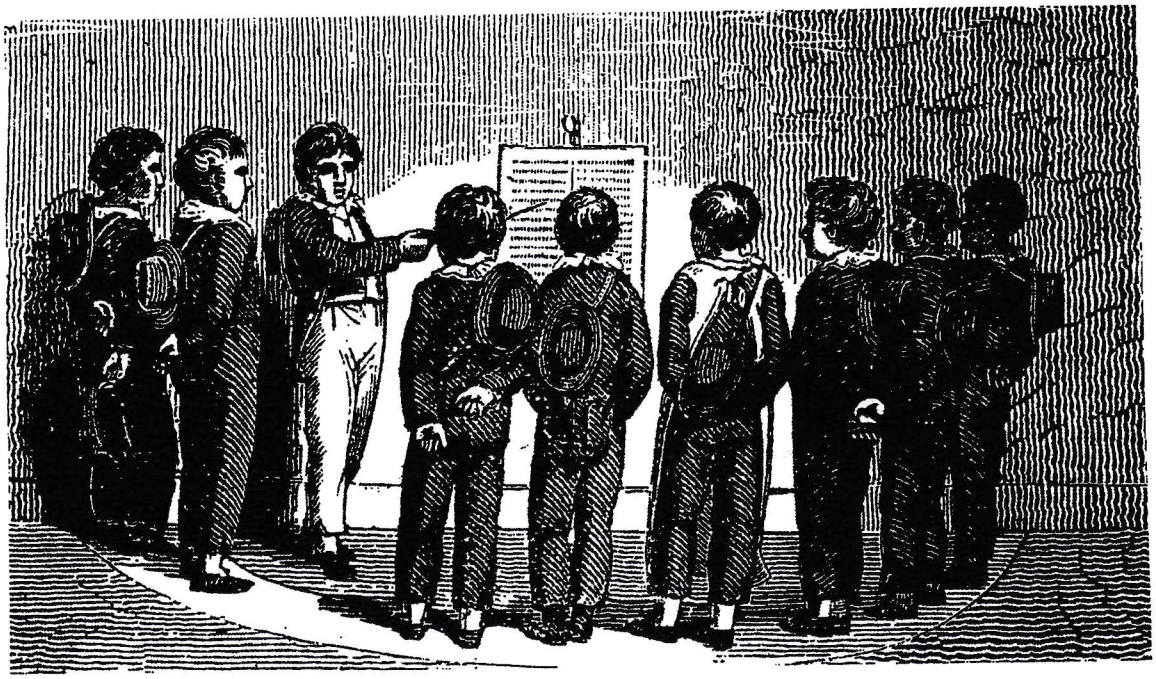


図2-5　モニターによる授業
生徒が一斉に石板をモニターに見せている（上）。壁にかかったレッスンブックを指し示し
教えるモニター（下）（Lancaster, *The British System of Education* より）

図　4

読み方・綴り方
1. A,B,C
2. 2文字やa,bなど
3. 3文字
4. 4文字
5. 5ないし6文字
6. 新約聖書
7. 旧約聖書
8. ベストリーダーからの抜粋
計　算
1. 数字の組み合わせ
2. 足し算
3. 複数の足し算
4. 引き算
5. 複数の引き算
6. 掛け算
7. 複数の掛け算
8. 割り算
9. 複数の割り算
10. 約分
11. 三角法
12. 練習

クラス分け表

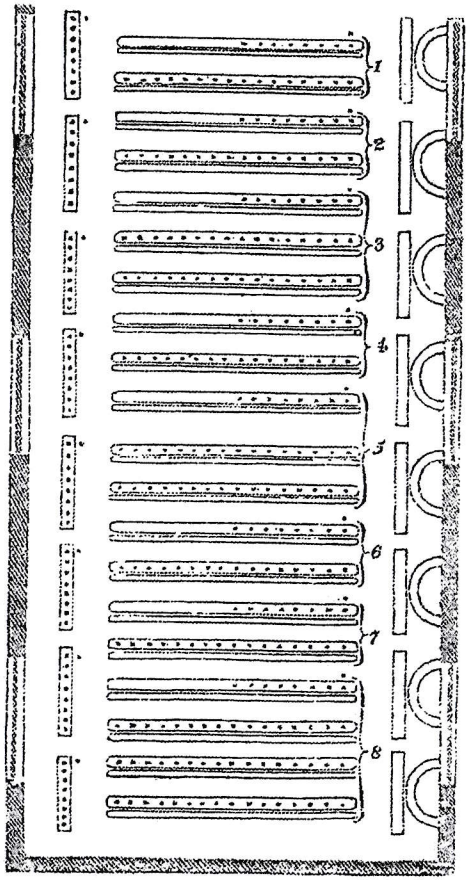


図2-3　ランカスターの学校の平面図　学習は、中央に並べられた机及び半円形のステーションで行われた。点は生徒とモニターを、数字はクラスを示す（Lancaster, *The British System of Education* より）

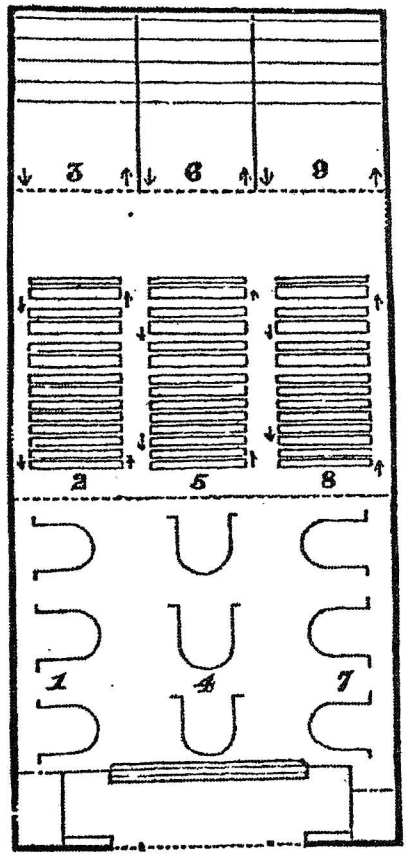


図3-4　内外学校協会による混合した教場配置
点線はカーテンを示しており、教場は３つに分割されている。３、６、９はギャラリー方式による学習、２、５、８は机での学習、１、４、７はステーションでの学習が行われる。
生徒は矢印に沿って、例えば１、２、３の間で移動し、横には移動しない

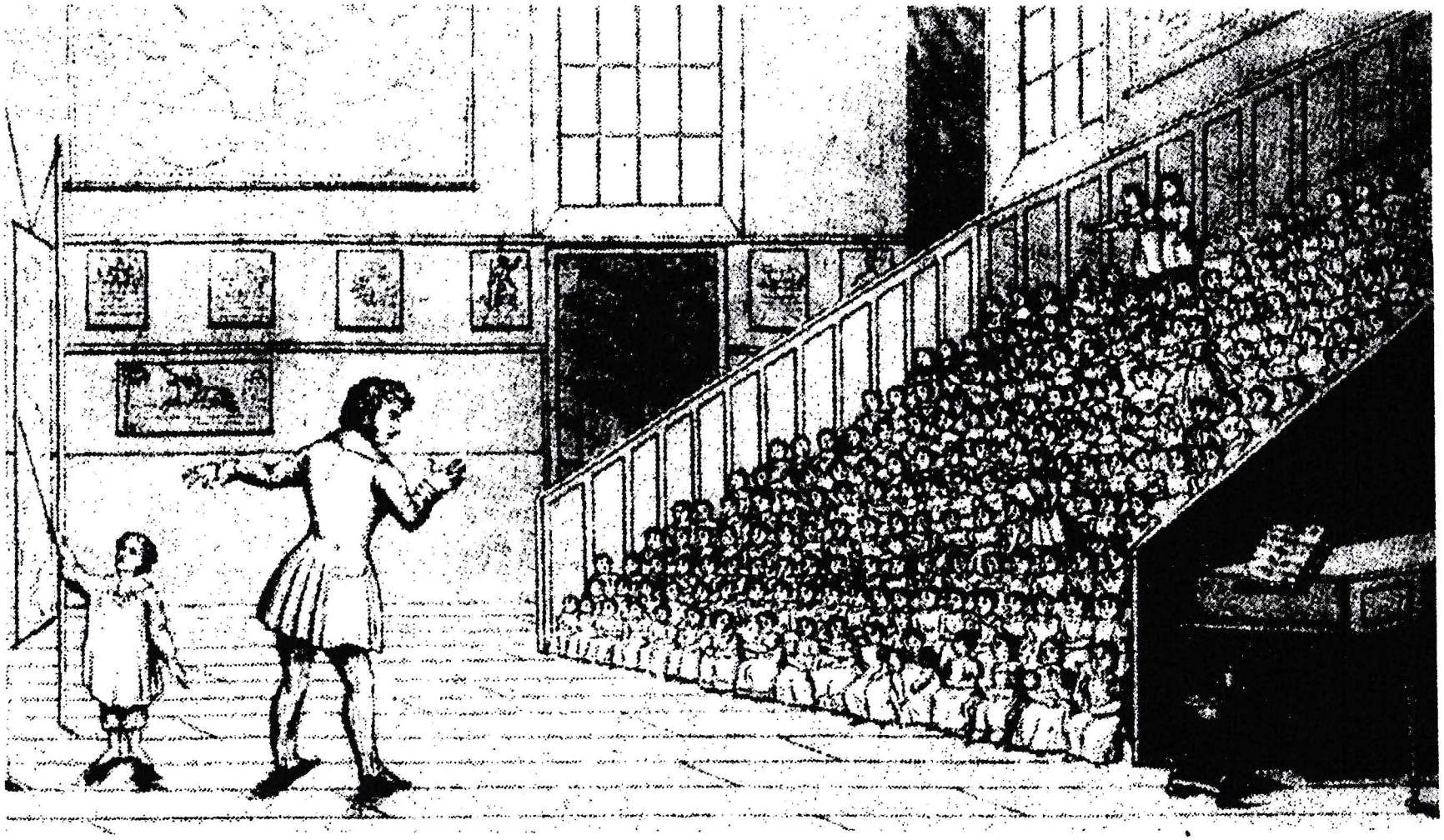


図3-2　ウイルダースピンのギャラリー方式の授業（ハミルトン『学校教育の理論に向けて』より）

図 6

改正教育令の定めたスタンダード

読みの段階

1、 単音節の言葉が読める
2、 学校で使用される初級読本の中から単音節文が読める
3、 学校で使用される初級読本の中から小段落が読める
4、 学校で使用される上級読本の中から小段落が読める
5、 学校の最上級クラスで使用される読本の中から詩が数行読める
6、 新聞記事等の現代文から一段落が読める

書きの段階

1、 口述した大文字、小文字を石版または黒板に筆記体で書ける
2、 活字体で書かれた文字を筆記体で書写できる
3、 読み方の試験と同じ段落からの一文をゆっくり１度読み、次に１語ずつ書き取ることができる
4、 読み方と同じ読本から、ただし既に読んだ段落以外の一つの文章を、１度に数語ずつゆっくり口述筆記できる
5、 学校の最上級クラスで使用される読本の中から、一つの文章を１度に数語ずつゆっくり口述筆記できる
6、 新聞等の最近の読物の中から、普通の長さの段落を１度に数語ずつゆっくりと口述筆記できる

計算の段階

1、20までの数字を黒板か石版に口述筆記する。20までの数字を読む。黒板に書かれた例題から口頭で１桁の数字を足し引きする。
2、簡単な足し算と引き算、九九の表
3、短除法（12以下の数で割る割り算）までの簡単な計算問題
4、複雑な計算問題（お金の単位を用いて）
5、複雑な計算問題（重さと長さの単位を用いて）
6、実用計算または売上伝票の計算

表７